

縄なわ

境さかい

むかし、江戸時代の享保のころ、横根村と大府村のあいだに「村境」の問題が起きました。

横根村の人々は、

「砂川のここまでは、わしらの村じゃ。」

といい張りました。反対に、大府村の人々も、

「そこは、大府村じゃ。横根村のわけはない。」

とゆずりません。横根村の人々も大府村の人々も、自分たちの言い分を変えようとはしませんでした。話はこじれるばかりで、どこまでが横根村で、どこからが大府村なのか、まったくわからなくなってしまうました。

それから、ますます村境の問題は大きくなるばかりで、いつこうに解決しません。しばしば横根村の人々と大府村の人々の言い争いが起こり、問題はどんどん大きく難しくなっていました。

「このまま争っていても仕方がない。ちゃんと横根の人たちと話し合って、きちんと

村の境を決めなくてはいけない。」

と、大府村の庄屋は考えました。

「しかし、わしが出て行つては、話がうまく進まないじゃろう。」

と迷いなやんだ末、自分の代理として、横根村に話し合いに行つてくれる人を探しました。何人かの人にお問い合わせしましたが、なかなか引き受けてくれる人はいませんでした。

そんな思いなやんでいる庄屋の姿を見て、大府村の組頭が代理を引き受けてくれました。

庄屋は、

「すまんのう。たいへんなことだろうが、わしの代わりに横根村に行つて、村の境を決めてきてはくれないか。」



と、組頭にお願いしました。組頭は、話し合うために横根村に出かけて行きました。大府村の組頭と横根村の人々は、問題になっている砂川近くの現地に行つて、話し合おうということになりました。話し合いが始まると、

「ここは大府村の土地じゃから、横根村は砂川のそのわきのところまでのはずじゃ。」

「いいや、ここはむかしから横根村だったんじゃ。勝手に大府村にしてもらつちやあ、いかんぞ。」

「大府村こそ、砂川のおくのところまでじゃねえのか。」

「今わしらがいるこの土地は、先祖代々、大府村だったところじゃ。むかしから横根の土地じゃねえ。」

というように、横根村の人たちも大府村組頭も、自分のいうことをおし通そうとするばかりです。

初めは、おだやかに話し合っていたのですが、最後には、大げんかになってしまいました。今にもなぐりかからんばかりの口げんかが続きました。いくらけんかしても、村の境は決まりません。どうどうおこつた横根村の人が、

「これ以上、いくら話したつてしょうがねえ。ここは、わしらの村じゃ。つべこべいうんじゃねえ。」

と、大府村の組頭を切り殺してしまいました。そして、砂川近くのその場所が横根村になるように縄を引き、無理やり村の境を決めてしまったのです。

代理をお願いした大府村の庄屋は、この出来事を知り、

「わしの代わりに行つたために、こんなことになってしまった。申しわけない。」  
と、たいへんなげき悲しみました。

組頭のなきがらを引き取り、自分の家にていねいにほうむり、「山の神」として祭り  
ました。

大府地区に伝わる地名にかかわる話です。

大府市体育館の西にある小さな川が、「砂川」です。この川沿いに「縄境」（大東町）という  
ところがありました。今となっては、「山の神」がどこにあったのかわかりません。